



Data

監督・脚本: フロリアン・ヘンケル・フォン・ドナースマルク

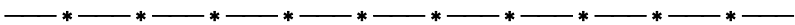
出演: トム・シリング/セバスチャン・コッホ/パウラ・ベアー/オリヴァー・マスツチ/ザスキア・ローゼンダール/ツアイ・コールス

👁️👁️ みどころ

「ベルリンの壁崩壊」を契機とした東西ドイツの統一から30年。日本の戦後は平和憲法の下で経済復興に専念できたが、ナチスドイツ崩壊後のドイツは大変！そんな中、教奇な運命を辿ったアーティスト、クルト・バーナートとは？

私を含む多くの日本人は、彼の名前も彼のフォトペインティングの手法も知らないが、「人物の名前は変えて、何が事実か事実でないかは、互いに絶対に明かさないこと」を条件として映画化を許された本作から見えてくるものは・・・？

伝記でもドキュメンタリーでもない本作から、「君は誰だ？」、「Ich, Ich, Ich。」(自我の確立)という「哲学的な問い」に、しっかり向き合いたい。



■□■統一から30年！そんな節目にピッタリの本作を！■□■

「ベルリンの壁」が崩壊したのは、1989年11月9日。そして「東西ドイツ」が統一されたのは、翌1990年10月3日だ。それから30年、東独育ちのメルケル首相がその半分の15年間にわたって統一ドイツを統治してきたが、その人気は今なお不変。あのおばちゃんのどこにそんな指導力があるのかよくわからないが、彼女の引退後数年すれば、きっと彼女を主人公にした映画が次々と作られるだろう。それはそれとしての楽しみだが、今般はそんな節目の年にピッタリの本作を鑑賞！

画家を主人公にした映画は、近時『ゴッホ 最期の手紙』（17年）（『シネマ41』未掲載分）等たくさんあるが、本作のイントロダクションには、「オークションに出品すれば、数十億円の価格がつくことで知られ、2012年には生存する画家の作品としては史上最高額で落札されたアーティスト、ゲルハルト・リヒター。現代美術界の巨匠にして、ドイツ

最高峰の画家である彼が、主人公のクルトのモデルだ。」と書かれている。そう言われても、私はそんなアーティストの名前を全く知らなかったが、そこでは、続けて「ドナースマルク監督が、リヒター自身の著書や伝記に魅せられて映画化を申し込んだところ、1か月にわたっての取材が許された。」と書かれている。もっとも、「ただし、映画化の条件は、人物の名前を変えて、何が事実か事実でないかは、互いに絶対に明かさないこと。」と言われたそうだが、これを読むと、ドイツ人がいかに何事にも厳格な性格（の民族）かがよくわかる。しかし、これはちょっと縛りすぎでは？私には、そんな不安がふとよぎったが・・・。

■□■退廃芸術展とは？叔母エリザベスの運命は？■□■

本作導入部では、1937年、ナチス政権下のドイツの都市・ドレスデンに暮らすクルト少年（ツァイ・コールス）が、芸術を愛する叔母のエリザベト（ザスキア・ローゼンダール）に連れられて、退廃芸術展を見学するシークエンスが描かれる。多くの見学者は、ナチスドイツの薫陶をしっかりと受けているガイドが、「ドイツの芸術を汚すものとして並べられた作品群を、口を極めて罵る」のをスナナリ聞いているようだが、クルト少年の感性はそれとは違らしい。しかし、ある作品を魅入られたように見ているクルト少年に対して、エリザベトが「私はこの作品が好き」と囁いたのは、2人の感性の一致を示すものだ。もっとも、エリザベトはすかさず「それをここで言っちゃダメ！」とたしなめたが、それは一体なぜ？それは、利口なあなたならすぐにはわかるはずだ。なるほど、なるほど・・・。

この導入部を観ている限り、エリザベトは鋭い感性を持った女性だが、同時に、今のドイツはナチス政権下にあるのだ、ということを理解し、それをしっかり付度しながら社会生活を営むことができる女性。そう思えたが、その後、全裸でピアノの前に座って「目をそらさないで。真実はすべて美しい」とクルトに訴えかける姿を見ていると、彼女は少し、感受性が鋭敏すぎるのでは・・・？今の時代ならそれだけの話だが、精神科の病院での治療も受けさせられたエリザベトは、さらにカール・ゼーバント教授（セバスチャン・コッホ）の診察を受けることになったが、その結論は？

彼は産婦人科の権威だったが、同時にナチス親衛隊の名誉隊員の権限を与えられていた。つまり、彼が「+」印をつけると、その患者（女性）は優生学的に“生きる価値のない命”だと認定され、安楽死させられることになるわけだ。ゼーバント教授によって優生学的に強制的な不妊手術を受けさせられると理解したエリザベトは、「それだけはやめて！」「ナチスの優秀な子供を産むから！」と懇願したが、そのあまりの激しさを見た、彼はエリザベトに「+」印をつけてしまったから、さあ大変。その結果・・・。

■□■ドイツ敗戦！しかし教授は無罪放免！それはなぜ？■□■

エリザベトがガス室に送られたのは、ゼーバント教授がエリザベトの診断書に「+」印を書き込んだため。つまり、産婦人科医として高い地位にあったゼーバントは、ナチス政権下で進められていた「心身ともに障害を負った生きる価値のない命」を選別し、安楽死させるというT4作戦において「+」印を書き込む権限を持たされていたわけだ。しかし、

私がスクリーン上を観ている限り、ゼーバント教授が「+」印を書き込むについての診断が十分とは到底見えなかった。すると、その責任は？

ナチス政権下でそんな権限を持たされていたゼーバント教授が、ナチスドイツの敗戦に伴って、ドレスデンを占領したソ連軍の捕虜にされたのは当然。ゼーバントが果たしていた役割を考えれば、彼は戦犯として死刑に・・・？誰でもそう思うところだが、「数奇な運命」はクルトだけでなくゼーバント教授も持っていたようで、彼を裁くべきソ連軍将校の妻が出産で苦しむ声を聞きつけたゼーバントの産婦人科としての卓越した技量によって妻を救うことができたから、その将校は大喜び。「俺がここの責任者である限り、君の命は保証する！」と宣言してくれたから、ラッキー！しかして、ゼーバント教授の数奇な運命は？

■□■この恋はロミオとジュリエットそのものだが・・・■□■

他方、戦後のドイツが東と西に分断される中で成長したクルト（トム・シリング）は、1951年、東ドイツのドレスデンで美術学校に入学できたから、ここからやっと希望に満ちた未来が始まることに。ところが、そう思っていると、ある夜突然、父親が首つり自殺を！これは、戦争中に家族の安全のためとはいえ、主義を曲げてナチス党员となったことを理由に教職を追われたことを悲観し、生きる目的を失ったためだから、かわいそう。もっとも、中国映画『活きる』（94年）（『シネマ5』111頁）を観れば、「人生はあざなえる縄のごとし」だということをはっきり教えてくれるから、彼はそんなことくらいで自殺する必要はなかったはずだ。

そんな状況下で学校に通うクルトは大変だったはずだが、絵画に没頭することで悲しみを癒す中、同じ学校に通う美しい娘エリー（パウラ・ベアー）と情熱的な恋に落ちることに。クルトがエリーの中に亡き叔母エリザベットの面影を見たのは当然だが、この良家のお嬢サマは、ゼーバント教授の娘だったから、何とも皮肉！まさに、この出会い自体が「数奇な運命」と言わざるを得ない。もっとも、クルトはエリザベトをガス室に追いやったのがゼーバント教授だということを知らないから、敵のファミリーだということをお互いに知らなかったロミオとジュリエットのように、2人はすぐに情熱的な恋に落ちた。そして、ある日、エリーは妊娠したことを告げたから、クルトは大喜びだ。

しかし、既にクルトの出自に気づき、画家という肩書も父親の自殺も、娘の相手としてふさわしくないと考えていたゼーバント教授は、中絶すれば色恋も覚めると考え、「エリーは胎児を取り出さなければ死ぬ病気だ」と嘘をついて、自ら手を下すことに。それを素直に信じたエリーもある意味単純だが、ゼーバントの思惑に反して、2人は変わることなく愛を貫き、結婚することになったから、アレレ。ゼーバントは、なぜそれを許したの？それは、クルトによって妻の命を救われたソ連軍将校から、「転勤のため、もはやこれ以上君の命を保証できなくなった。」と伝えられたゼーバント教授が、西ドイツへの亡命を決意したため。つまり、自分の亡命をカモフラージュするために娘夫婦をドレスデンに残そうと考えたわけだ。なるほど、なるほど。ここらあたりのストーリー構成は、かなりご都合主

義と言わざるを得ないが・・・。

■□■クルトの芸術は？君は誰だ？Ich、Ich、Ich。■□■

本作中盤では、ゼーバント教授が西ドイツへの亡命を果たしたのちも、東ドイツのドレスデンに残り、次第に、マルクス、レーニン風（＝ソ連風）の社会主義リアリズム芸術にハマっていく（？）クルトの姿が描かれる。これは、『戦争と人間』（3部作）（70、71、73年）でも共産主義を信奉するプロレタリア画家たちを登場させて描かれていたが、その芸術にはかなり違和感がある。クルトはその方面でもそれなりの実力が認められていたが、次第に社会主義リアリズムへの疑問を深めていったため、結局自分にとっての真実が何かを求めてエリーと共に、1961年に西ドイツへ亡命することに。

私は学生運動にのめり込んでいた時期の“勉強”の中で、マルクスやエンゲルスが「資本論」を書いた前提にドイツ哲学があることを学んだが、それはヘーゲルの弁証法をはじめとして、きわめて難解。もともと、ドイツはそんな国だから、「ベルリンの壁」が築かれて、ドイツが東西に分断された後に、デュッセルドルフ美術アカデミーへの入学を、ドイツアート界の伝説的存在であるアントニウス・ファン・フェルテン教授（オリヴァー・マスッチ）に許可されたクルトが、教授の「自由があるのは芸術だけ」という言葉に鼓舞され、新たな作風を模索したのは当然。また、この時代、西ドイツでは、モダンアートが旋風を巻き起こしていたから、クルトも前衛的なアイデアを駆使した絵画に挑んだのは当然。クルトはある日、自分の作品をフェルテン教授に見てもらう機会に恵まれたが、そこでフェルテン教授から「君は誰だ？これは、君じゃない」と言われたから、アレレ・・・。

私は大学時代に第二外国語としてドイツ語を選択したが、今では「ich liebe dici」以外ほとんど覚えていない。ドイツ哲学では、デカルトの「我思う、故に我あり」が有名だが、本作でも、盛んに「Ich, Ich, Ich。」の言葉が登場してくる。これは、芸術の世界ではとりわけ「Ich＝自我」の確立が重要という意味だ。フェルテン教授のこの言葉を聞いたクルトは、それまでの作品をすべて取り壊し、新たに真っ白なキャンパスの上に新たな作品を描こうとしたが、昨日がダメなら、今日もダメ！これでは明日もきっとダメ・・・？そんなクルトの姿を見て、愛する妻エリーの父親、ゼーバント教授からは、30歳になってもまだ名を成すどころか無収入であることを蔑まれたが、そこで彼の頭にひらめいたアイデアとは？

■□■魂の放蕩の末の到達点は？フォトペインティングとは？■□■

私は美術館や絵画展に行くのが大好きだが、寡聞にして、クルトが魂の放蕩の末にたどり着いた「フォトペインティング」のことは全く知らなかった。これは、パンフレットによれば、「写真を描き写したうえでそこに刷毛でボケやブレを加える」手法だが、彼にそんなアイデアがひらめいたのは、少年時代のクルトの目に焼き付いた、叔母エリザベトが家族から切り離されて病院に連行される時の1枚の写真からだ。それを指示し実行したのは、一体誰？

本作でクルト役を演じたのは、若き日のレオナルド・ディカプリオとよく似た雰囲気の俳優トム・シリング。少年時代のクルトが抜群の可愛さなら、20代、30代のクルトもハンサムさにおいてはピカイチだ。そんなトム・シリング演じるクルトが、取りつかれたようにある日の新聞に掲載されたある男の写真を模写していく風景は迫力がある。そんなに思い詰めてこの作業に没頭しているのは、彼が今やっと自分の芸術（絵画）の到達点を見出したためだが、1枚の写真を模写し、そこにペインティングをかけるクルトの芸術の価値はどこに？

クルトが苦勞の末に完成させたその作品を見たゼーバントが激しく取り乱したのは当然だが、さあ、こんな“対決”を終えた後の2人の男の“数奇な運命”とは？それは、クルトが続いて完成させた、代表作ともいえる「階段上のヌード」の感性ストーリーと共に、あなた自身の目でしっかり鑑賞してもらいたい。

2020（令和2）年10月19日記